

中央とのパイプをつくり、医師主導治験や臨床研究をサポートする。



今年9月、金沢大学附属病院の病院長補佐に伊藤勝彦氏が就任した。伊藤氏は主に特命事項を担当する病院長補佐として期待されている。どのようなミッションや役割を担っているのか、今後の動きなども含めてインタビューした。

医師主導治験や臨床研究を支援

—金沢のアクティビティとしてどのようなことを中央に伝えたいとお考えですか？

伊藤 ◆ 実際に今、二つのプロジェクトを計画しています。ただ残念ながら、中身については詳しくお伝えすることはできません。というのも、相手があることなので闇雲に公表してしまうと相手にご迷惑がかりますし、プロジェクト自体が壊れてしまうこともありますからね。首都圏にパイプをつくるには相当知名度の高いところと組む必要があります。同時に、金沢にとつてもメリットがないと意味がありません。それを例えば、中央官庁と相談して今後一緒に連携または共同で進めていけるものにしたと考えています。そのために今、関係者の皆様のご理解をいただいているところで、私一人が勝手に決めて進められるものではありません。皆様の合意をいただき、機運が盛り上がりがないとうまくいくものではないと思っています。

—ご専門の臨床研究などに関係するプロジェクトと考えていいのでしょうか？

伊藤 ◆ そう考えていただいていると思います。金沢大学附属病院では医師主導治験や創薬につながる臨床研究を模索しています。これを数多く金沢でやれるようにすることが、中央への一つのアピールになると考えています。特定臨床研究については、臨床研究法と言う新しい法律ができて、未承認の薬を使って万人が認める臨床研究を進めることが可能になっています。通常の治験は、薬の製造販売の承認を得るのに必要な情報を取る目的だけのために行う臨床試験ですが、それ以外のことはできません。研究目的で薬の効果や、その薬を使って病気の謎を解明するといったことはやってはいけないのです。今回、新しい臨床研究法によりその道が開けたことは大きな前進です。今後、金沢で特定臨床研究や治験が積極的にできるような仕組みづくりをして、実現をめざしたいと思っています。

北陸と中央とのパイプづくり

—もともとのご専門は薬理学とお聞きしています。金沢大学附属病院との接点は？

伊藤 ◆ 過去には金沢大学医学部の客員教授をさせていただいたこともあり、金沢にはよく来ていました。金沢市は北陸の中心都市ですし、金沢大学は旧制四高の流れを組む北陸の雄というイメージを持っていました。今回、以前から懇意にさせていただいている金子周二教授からお誘いを受けました。金沢への思い入れと、たまたま選層を過ぎて次の職をどうしようか考えていた時だったので、喜んでお引き受けさせていただいた次第です。

—病院長補佐としての基本的なミッションについて教えてくださいませんか？

伊藤 ◆ 第一に、首都圏や関西圏とのパイプづくりです。中央の情報を北陸に持つてくると同時に、金沢大学や金沢大学附属病院のアクティビティを中央に知らせる。

そういうミッションを受けています。率直に言って、金沢大学や金沢大学附属病院の存在は北陸ではダントツでも、首都圏や関西圏では残念ながら知名度はあまり高くありません。北陸で良い仕事をして中央に届かないし、情報一つとってもリアルタイムに入ってきてません。今後、金沢大学の研究を発展させていくうえで、中央とのパイプづくりは重要です。そのためこれまででの経験や実績を生かして、多少なりともお役に立てればと思っています。

—パイプづくりにあたって具体的にどのようなことをお考えでしょうか？

伊藤 ◆ 中身についてはあまり明確に語れない部分ですが、例えば霞ヶ関の中央官庁や企業などにはたらきかけ、きっかけや繋がりをつくるリエゾン活動のイメージでしょうか。同時に、金沢のアクティビティを首都圏の有力なところ、決定権を持つところに伝える活動も行っていこうと考えています。

—医師主導治験の仕組みづくりとはどのようなことになるのですか？

伊藤 ◆ こちらの受け入れ態勢の問題というより、私自身は金沢に試験のリクエストがどんどん来るような状況をつくることだと考えています。医師主導治験とか臨床研究をやるぞと勢いづいていても、実際にオーダーがないとなかなか実現は難

しい。まずは依頼者から、これはぜひ金沢にお願いしたいと、いろんな人に興味を示してもらうことが先決です。そのうえで金沢から、自分たちはこういう研究をしているからなんとか研究費を調達したいとか、どれだけの価値がある研究かをうまく伝えていく、そういう仕組みが必要だと思っています。

Special Interview



Ito Katsuhiko

伊藤 勝彦

金沢大学附属病院 病院長補佐



日本の「ジヨスリンセンター」をめざす

— 金沢大学、あるいは金沢大学附属病院にオーダーがどんどん入ってくるようにするには、どんなことが大切だとお考えですか？

伊藤◆ 私の理想とするところは、アメリカのボストンにあるジヨスリンセンターという医療機関です。ここはアメリカの医薬品を承認するFDA（食品医薬品局）が、糖尿病の薬に関しては「ジヨスリンセンターで治験をしたのか？」を判断基準にするほど、糖尿病領域に関してはキーを握る存在です。金沢大学に何かの領域の権威の先生が研究者がいらつやって、「YES」と言わないとなかなか薬の承認が難しい。そういうようなイメージでしょうか。もう一つは、アメリカのノースカロライナにあるデューク大学です。ここは臨床研究が集まる大学として有名です。臨床研究の世界のトップが集結し、そこには投資家や企業が集まり、製薬メーカーや臨床開発を支援する会社もたくさん

入ってきます。あくまでも理想ではありますが、そういう存在になれたらいいと思っています。

— 金沢大学附属病院の研究分野で、その可能性やポテンシャルはあるとお考えですか？

伊藤◆ なかなか答えにくいですが、グリーンヒットするものは十分あると思います。現状では金沢大学を通さないと薬は承認しないと言うものはありません。ただこれも重要なことですが、例えば、がんの領域では国立がん研究センターのような疾患に特化した国立研究機関があるので、国内で権威をめざすのは正直なかなか難しいと思います。特殊な疾患分野を狙っても正直言って、市場が小さく投資効果があまり期待できない領域には投資をするところが少ないので、研究をすすめることが難しい。医師主導治験や臨床研究といっても財源がないとできません。

— 要は、財源を確保するにはどういうところと組むか、が重要になってくるん？

伊藤◆ そういうことです。大学側は財源がないと研究が続けられない立場ですが、逆に投資する側は、患者さんを対象とした研究をすることはできません。大学病院と投資家の間に立って私たちのような人間が介在し、治験や臨床研究がしやすいような環境をつくる。あるいは早く結果を出すような方法を提案する。そういうことが非常に大事になってきます。目下のところは、医師主導治験や懸案のプロジェクトをうまく軌道に乗せ、成果をあげることが私に課せられた役割であり、任務だと考えています。

石川の武器を最大限に生かす

— 中央に働きかけるためのターゲットとしては、がんや認知症といった患者数の多い分野を狙うのか、それとも何か特殊な領域を狙うのか、それについてはいかがですか？

伊藤◆ それは正直なところまだわかりません。というのは、私自身まだ着任して間もないこともあって金沢大学や大学病院の強み、何が武器なのかについて正確に把握し切れていないからです。がんや認知症というのは、言ってみれば今現在の世間のニーズです。でも世間のニーズがあるからといって、それに合わせてやりたくない研究をすすめるのでは本末転倒で、学問を切り開くべき大学の価値が失われます。大学発として何を発信していくべきかは、私自身がまず金沢大学や病院のことを知ることが重要です。着任以来、核となる先生方にインタビューには回りましたが、また医薬系が中心です。今後は工学部系や本学にも出向いて、各先生方と人間関係を築いていくことが重要だと思っています。

— 地域の医療機関との関係や環境づくりについてはどのようにお考えですか？

伊藤◆ 一つ中央の関係者に話をしているのが、石川県は人口分布の面で全国の縮図になっていることです。能登北部、能登中部、金沢中央、南加賀、それぞれの地域の人口分布を分析してみると、高齢者だけの地域、高齢者や若者が増えている地域、若者や若年層が多い地域、都市部に人が集まっている地域など、石川県のデータが全国の縮図になっている。その医療情報を活用していくと、例えば厚生労働省が欲しがっている全国の疫学調査やサンプル調査に生かすことができるかもしれません。今後、石川県の特性や優位性を生かしていくためにも、地域の皆さんにご協力を頂かないといけないと思っています。いずれにしても、私に求められるのは結果を出すことです。皆さんのご期待に添えるように、精一杯努めさせていただきます。

Special Interview

金沢大学附属病院 病院長補佐に聞く

Profile

伊藤 勝彦(いとう・かつひこ)

金沢大学附属病院 病院長補佐

【略歴】

1987年3月 大阪市立大学大学院医学研究科博士課程(生理系専攻)修了。同年4月、武田薬品工業株式会社に入社。心循環器系薬剤の研究開発および一般薬理試験業務に従事。1996年からドイツ連邦共和国シュレースビヒ・ホルシュタイン州・キール大学医学部薬理学教室客員研究員。帰国後、薬剤安全性研究所勤務を経て海外臨床開発部門に転属。プロジェクトマネージャーとして海外臨床試験および申請にたずさわる。1999年5月から研究本部にて創薬研究のマネジメント業務に従事。2005年4月、財団法人先端医療振興財団(現公益財団法人神戸医療産業都市推進機構、本庶佑理事長)に転籍。文部科学省地域クラスター創成事業・科学技術コーディネーターとして医学研究(再生医療、PET等映像医療)の事業化に従事。2010年10月、学校法人北里研究所入所。2013年4月より治験、臨床研究の統括本部である北里大学臨床研究機構本部長。2018年12月退所。2019年9月より現職。

